

風薫る春のオランダより...

Spring 2011 No 10

# Newsletter Circle of Storytelling

語りの輪 ニュースレター



# ウィムxストーリーテリングin2011 冬&春



2010年12月末、「クリエイティブ・クリスマス」と題したストーリーテリングプログラムが東京で行われました。1年半ぶりの来日、そして3日間という短期プログラム。今回の来日でウィムは何を体現しようとしたのでしょうか。

そして今年2月には、オランダで5日間ストーリーテリング講座が開催されました。クリスマスプログラムを体験された村上恭仁子さん、そして日本からオランダでの講座に参加して下さった増井由紀美さんからの言葉を以下に紹介させていただきます。

## 「ラビリンス」を体験して 村上恭仁子

2010年冬。「ラビリンス、そして…私を導く見えない糸」こんな謳い文句とストーリーテリングとは、何とも結びつきがたく、講座内容が想像できないまま、とりあえず、参加を申し込んだ。

12月24日金曜日クリスマスイブ。夜行バスで東京へ向けて出発。翌12月25日、榎町地域センターにて、ワークショップ「パーソナルヒストリーに秘そむクリスマス」が始まった。例のごとく、歌から始まり、そしてウィムからの質問。「クリスマスとはあなたにとって何ですか。」十数人の参加者が、一人一人自分なりのクリスマスにまつわるお話をした後、ウィムは言った。「ありがとう。本当にいろいろな思い出がありますね…。しかし、誰一人、クリスマスとは何か、という問いには答えられませんでした。クリスマスの周辺の話は話しても、クリスマスとは何か、という問いには答えにくい。つまり、本当に大切なものは見えないのです。」その言葉を聞いた後、私たちは「infinity(無限)」を炭で描くワークを行い、見えないものを見るようにするための方法を鑑賞し模索した。

休憩後に用意されていたのは、「scar(傷)」について語り合う、というワークだった。参加者それぞれのscarにはそれぞれの喜怒哀楽が含まれていたのだが、実際、このワークの目的は、それぞれのscarには意味があり、それがなにか

を探るといふものだった。続いてこれまでにおかしな「mistake(失敗)」とこれまでに経験した「decision(決意)」について参加者と共有した。無意識や本能、論理的な思考というものは目には見えないが、それらは私たちの日常生活にscar, mistake, decisionとして現れるものである。そして、今回のワークショップのテーマはこの3つである、とウィムは説明した。付け加えてウィムは「キリストが誕生したことによって人間は自分の決意に責任を持たなければならなくなった」と言ったが、もしかすると、これが彼の一番言いたかったことなのかもしれない。

夜。場所を変え、オープンフォーラム早稲田にて、講演「ストーリーテラーの生き方」が始まった。ウィムの活動は5つの柱からなっており、その一つの紹介と、合わせてお話をいくつかしてくれた。残念ながらここでは割愛する。

さて、12月26日、いよいよラビリンス入りが始まった。歌を歌いながら心を解放した後、エジプトのファラオの息子の物語を楽しく聞いていると、突然、ウィムが「お母さん、何か教えてください」と参加者を物語に登場させた。そうやって、物語はおもしろおかしく作り上げられ、でも何とかファラオの息子は「賢者の石」を見つけ、帰途に着くことができた。このお話は7つの場面に分かれている。①call「召命」②threshold「出発」③wandering「迷い」④help「助け」⑤fight「闘い」⑥return「帰還」⑦sharing「共有」。そし

て、それは私たちの人生も同じである。ウィムは私たち自身の①～⑦をグループ内で共有させたが、それは本当に貴重な体験だった。そもそも、バイオグラフィーのワークショップを期待していたわけではない。だから一層、参加者の心のため息が何とも心に沁みた。昼からは実際にセンターの体育館で大きなラビリンスを作成した。直径4～5mはあったらどうか。グループごとに、ひもで長さを均等に測り、テープを貼り、飾り付けをした。長い長い時間だった。この1時間ほどの間で、私たちはきっと神妙になり、各々の人生に思いを馳せ、心を落ち着けたのに違いない。そして、いよいよ出発。作成したラビリンスの中を、ファラオの息子が辿った道と年月に心を重ねながら、一人

一人が歩いて行った。私は出発前から涙が出て止まらなかった。これまでにいろんな決意をしてきた。2008年秋、京田辺市の公民館で出会ったウィムの講座から2年。触れたかったものに触れることができた。そして、何とか繋ぎとめたい、そんな2年だった。仕事を辞め、新たな道へ踏み出す。これから辿る道は、はるかに厳しいものになるだろう。そんなことを思うと、不安、というより、人生への畏敬の念、と言った方がよい、そんな思いが溢れて止まらなかった。

この2日間の体験を共有できた参加者のみなさん、フォーラムスリーのしまだれいこさん、佐藤まさしさん、通訳の山上久仁子さん、そしてウィムに香林さん、心より感謝申し上げます。

## Storytellingの魔法を伝授される

増井由紀美

2011年2月7日から12日まで、Hengelo のKasbahにてWim Wolbrink先生指導の下、Storytellingのコースを受講する。その第一の理由は、初めてウィムさんのパフォーマンスを観た時の深い感動である。それは、2年前のクリスマスの夜、母校である津田塾のチャペルにおいてであった。語りとわずかな動きだけで見る者の想像力に働きかけ、心を揺さぶる技に圧倒された。第二の理由は、翌年、私が教鞭をとる敬愛大学で学生を対象に開いていただいたワークショップにおいてである。身体を動かしながらの「授業」に受講者全員が見事な集中力を発揮していた。私はこの教授法を日本の大学英語教育に活かしたいと思った。それにはまず私がStorytellingを学び、知る必要があった。

5日間の集中コースは午前9時から午後1時まで、1日4時間の猛特訓であった。まずは空間を操る技について述べたい。毎朝、クラスは自分の分身を前後左右上下に意識する体操から始まった。私にとっては初めての動きであったが、面白いことに、いつの間にか教室の角から角まで自分のエネルギーが届くという実感が持てるようになっていた。この「体操」の効果か、舞台のサイズが野球のベースのように小さくても、野球場のように広くても演技が可能であると思えるようになった。次に特筆すべきは、五感を働かせる訓練がもたらす効果についてである。詩や物語を舞台上で演じるにはこれは不可欠だが、実際英文のテキストを教材に用いながら、言葉が演者の想像力によって血となり肉となり、そしてそれが声となることを味わえば、学習者はそのテキストの内容を習得するはずである。私は日本の学生達にこの技を伝授できそうな気がする。新学期が楽しみである。





## 3月20日はストーリーテリングday!

3月20日はストーリーテリングの日。それは北半球では春、南半球では秋の始まりの日です。アジアやオーストラリアでお話を聞いた人たちがその余韻に浸っている頃、ヨーロッパやアメリカではようやくお話が語られようとしている、世界各地で一日中ストーリーテリングが木霊する日です。

ウイムの住む町ヘンゲローでも、語りの巡礼隊が二日間にわたって10校の小学校を廻り、総計3100人の子どもたちにストーリーをとどけました。今年のテーマは「水」です。校庭に全校生徒が集まる中、青年劇団による“水の世界の人々”の幻想的なストーリー劇が行われ、その後子どもたちは“水の世界のストーリーテラー”8人に率いられて各教室で水にまつわる物語に聴き入りました。

「ストーリーを語ると、それを聴いた人の内に何かが起こる」—そう、ある小学校校長が話してくださいました。この2日間、3100人の心それぞれに何が起こったのでしょうか。その日、ストーリーを聴き終えた11歳の女子生徒3人が、一人のストーリーテラーのもとに駆け寄ってこう言っていました。「あなたは自分が語ったストーリーを本当に信じてる。ね、そうなんでしょう?私にはそれが見えたわ。」

東北地方太平洋沖地震が起こってすでに一ヶ月以上が経ちました。遠く離れたオランダに住みながらも、今も日本のニュースを毎日耳にします。

このニュースレターを受け取られる方の中には被災地にお住まいの方々もおられます。被災地やその側でなくとも、心休まらぬ思いで日々過ごしておられる方が大勢おられることと思います。オランダでも、日本の惨状を目の当たりにして心を痛めている方が多数います。今、世界各地でも様々なことが起こっています。私たちが住むこの地球、そしてこれからの未来を創ることもたちのために、今、それぞれの場所で自分のやれることをしっかりとしていくこと、それを改めて感じています。

被災者の方々、日本の皆さまのことを思い、心からお祈りしています。

ウイム・ウォルブリンク  
米屋香林

---

Circle of Storytelling  
Eendengang 75 7552KN Hengelo, The Netherlands  
Tel: +31-74-2422696 Web: [www.werder.jp](http://www.werder.jp) Email: [info@werder.jp](mailto:info@werder.jp)  
日本支部: 〒939-8211 富山県富山市二口町5丁目3番地14 Tel/Fax 076-422-5102  
発行・編集: 米屋香林 製版: De Lijn 印刷: RDS、(株)ウエーブ 配送: ヤマト運輸